開催地名	長崎県島原市
開催日時	令和８年１月 21 日（水）　19：00　～　20：30
開催場所	島原市有明総合文化会館（グリーンウェーブ）
語り部	柳迫　長三（広島県広島市）
参加者	市民　約 260 名
開催経緯	雲仙普賢岳大火砕流発生から 30 年以上が経過し、少しずつ記憶が薄れつつあるのが現状である。しかし、溶岩ドームや眉山の危険性がなくなっている訳ではなく、防災意識を維持し高めることは重要である。そこで防災活動の先進地域の講演を聞くことにより、自主防災組織の再編を進めることや具体的な活動内容の指針を得たいと考えた。
内容	「地域づくりは防災から、命を守るコミュニティの再構築」 ― 広島･落合学区での豪雨災害と、多世代を巻き込む「防災委員会」の挑戦 ― （１）はじめに 広島駅から北へ８キロほど走った場所に、私の住む落合学区がある。この 20 年間、私たちは三度もの大規模な豪雨災害に見舞われた。平成 11 年の「6.29」、平成 26 年の「8.20」、そして平成 30 年の西日本豪雨である。立て続けに襲いかかる災害の中で、私たちは嫌応なしに意識を高めざるを得なかった。 しかし、最後の大きな災害から 10 年が経過しようとする今、人々の意識は再び以前の状態に戻りつつある。さらに、地域の高齢化や、共働き世帯の増加による「昼間の大人の不在」、マンション住民との交流の断絶など、コミュニティの形も大きく変わった。こうした中で、いかにして「子どもの命」を守り、地域の絆を繋ぎ止めるか。私は、「地域づくりそのものが防災である」という信念のもと、活動を続けている。 （２）被災の記録 広島の土砂災害には、恐ろしい特徴がある。犠牲者の約８割が「屋内」で亡くなっているという事実だ。家の中にいれば大丈夫、今まで大丈夫だったから今回も平気だろう。そんな「正常化バイアス」が、避難の決断を遅らせ、土石流が家ごと大切な命を飲み込んでいったのである。 避難所の運営においても、苦い経験がある。かつて大雨の中、住民が避難所へ駆けつけた際、行政の担当者が到着しておらず、鍵が開いていないことがあった。泥まみれの住民たちがずぶ濡れのまま玄関先で待たされる状況を見て、私は「行政を待っていては命を救えない」と痛感した。

	また、避難指示が出た際、家に一人でいた子が親に電話をしても、渋滞で帰れない親から「そこにいなさい」と言われ、逃げ遅れそうになった事例もあった。家庭内での対話がいかに不足していたか、その現実を突きつけられた。 （3）事前の備え 私たちの基本方針は「行政に頼らない防災」。町内会の役員が数年で交代しても知識が途切れないよう、熱意ある有志を集めた実働部隊「防災委員会」を組織した。現在、40 名の「防災士」が地域を支えている。 具体的な備えとして、私たちは IT とアナログを融合させた安否確認に取り組んでいる。こうした小さな準備の積み重ねが、いざという時の落ち着いた行動に繋がる。 ･無事タオル（黄色いハンカチ）：災害時、玄関先に掲げることで安否を可視化。消防団と連携し、地域を巡回チェックする体制。 ･安否確認アプリの導入： スマートフォンを通じ、「避難完了」「要支援」をリアルタイムで把握する独自システム。 ･命の袋（貴重品コピー）： 100 円ショップの袋を活用し、免許証や通帳のコピーを常備する「命の袋」の全戸配布。 （4）心のケアの大切さ 避難生活が長引けば、体も心も疲弊する。私たちは避難所を「耐え忍ぶ場所」ではなく、少しでも「快適な場所」にするための整備を進めてきた。板の間で寝る高齢者の負担を減らすため、独自の予算で簡易ベッドやテント、シャワー室、さらには充電器までを揃えている。 また、コミュニティの維持には、現代のライフスタイルに合わせた配慮も欠かせない。平日の夜 19 時から会議を行うのは、現役世代が参加しやすく、かつ土日は家族との時間を大切にしてもらうためである。 私が毎朝、隣の家の小学生を学校へ送り届けているのも、実は「共助」の第一歩だ。日頃から「お節介」と思えるほどの付き合いがあるからこそ、いざという時に「助けて」と言い合える関係が生まれる。防災とは、特別な訓練だけではなく、こうした日々の隣近所との仲の良さに支えられている。 （5）伝えたいこと 私たちの活動の核は、子どもたちを「防災の主役」に育てることである。年間 40 時間以上の防災学習、そして「キッズ防災士」の養成。広島のプロ球団のロゴを

	使った認定証や缶バッジは、子どもたちのやる気を引き出し、その姿を見た大人たちの意識をも変えていった。子どもが「危ないから逃げよう」と言えば、頑固な大人も腰を上げる。今では中学生や高校生が避難所運営の班長を務め、外国人の対応まで担ってくれるようになった。 「防災は、みんなでやるもの」。一人のアイデアを周りに伝え、真似し合い、輪を広げていく。今日この話を聞いた皆さんも、ぜひ家へ帰り、隣近所と声を掛け合うことから始めてほしい。それが、次の災害から大切な人を守る、確かな一歩になるはずだ。
開催地より	人口減少や地域の高齢化といった課題がある中、地域を繋ぐ活動、取り組みが数多くあった。自助と共助が両輪となって、幅広い世代、地域に防災活動が広がっていることが理解できた。 先進地の講話により、島原市で毎年実施している自主防災活動へのテコ入れもできるものと期待できる。熱心な取り組みをしている地域もあるので、より一層意欲が高まることにつながるものと思われる。組織再編を進め、地域の繋がりを確かなものにしたい。